



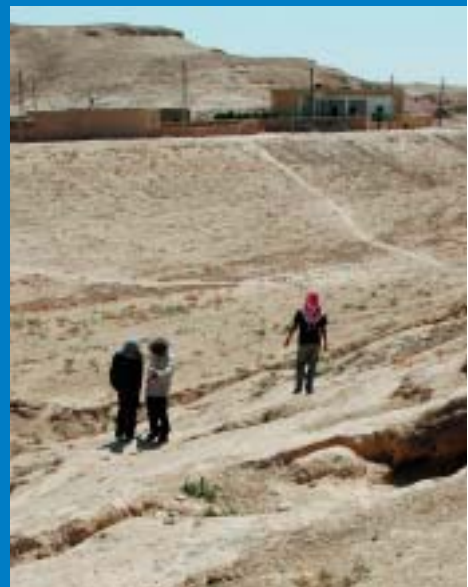
# Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

## セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金  
「特定領域研究」  
Newsletter No. 10

2008年3月号



## はじめに

平成19年度の研究もあとわずかです。先日2月16日におこなわれた第4回公開シンポジウム「西アジア部族社会とビシュリ山系」は成功のうちに終了しました。

ニューズレター本号は3編の論考で構成されていますが、そのひとつは、西秋良宏氏の「西アジア部族社会とビシュリ山系 - 第4回公開シンポジウムの記録」です。氏が言うように、今回のシンポジウムは、本領域メンバー相互の情報交換、共通討議の場であったこれまで3回のシンポジウムと異なり、本領域の全体課題「セム系部族社会の形成」研究に直接つながる個別成果の報告で構成されたことに特徴があり、今後の研究進展に大いに寄与するものだったと思います。この成功をもたらしたのは、領域のメンバーすべてが具体的な3つのテーマ（ビシュリ山系の自然と文化、セム系民族の生活と文化、文献・考古資料からみた部族）にエントリーしたことによりですが、プログラムを入念に準備された氏の努力のたまものです。

長谷川敦章氏の「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の測量調査」は、1) 同遺跡の立地と周辺の環境、2) 遺跡の現状と測量調査、3) 調査の成果、を内容としています。木内智康氏とともに同遺跡の全体測量と発掘調査を中心的に担ってきた長谷川氏の論功故に、同遺跡の本来の大きさを復元するなかで、テル・ビーア、テル・ハディディ、テル・エツ・スエイハット、セレンカヒエ、ハラワA遺跡など大小様々な周辺遺跡を参考にしながら、ユーフラテス河中流域におけるテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の位置づけを考察しようとする意気込みをにじませています。

シリア・タバン遺跡の発掘調査で出土したアッシリア文書の解読にこれまで取り組まれ、計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」(研究代表者：沼本宏俊)の研究協力者である柴田大輔氏は「中期アッシリア - アッシリアの誕生」において、「アッシリア」の概念を整理され、その誕生と発展の概要を述べています。「タバン遺跡の研究を通してアッシリア王朝の未知の側面の解明が可能」とする氏の記述は研究の進展を大いに期待させます。

以上のように本号は、「研究成果の迅速な公表」、「若手研究者による研究成果」という本領域の主要課題にかなう3編の論考を内容としています。

平成20年3月10日

領域代表者 大沼克彦

## 目次

西アジア部族社会とビシュリ山系 - 第4回公開シンポジウムの記録	西秋良宏	1
テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の測量調査	長谷川敦章	5
中期アッシリア アッシリアの誕生	柴田大輔	10

表紙

A  
B | C

A：ガーネム・アリ遺跡周辺のユーフラテス河畔平野とビシュリ台地

B：ガーネム・アリ遺跡頂上平坦部の現代イスラム墓地

C：ガーネム・アリ遺跡周辺の古代墓地

# 西アジア部族社会とビシュリ山系 第4回公開シンポジウムの記録

西秋良宏（東京大学総合研究博物館）

計画研究「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」研究代表者  
総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」研究分担者

はじめに

本特定領域研究では、これまで3回のシンポジウムをおこなってきた。平成18年3月に「ビシュリ山系研究史と研究の方向性」、平成18年7月には「セム系部族社会の形成 研究の現状と課題」、そして平成19年3月に「セム系部族社会の形成 - 平成17-18年度の研究成果」。これらのシンポジウムは一般の方々への成果公開を目的として開催しているものであるが、全部で14にもものぼる計画研究、公募研究への参加各班にとっては互いの情報交換、共通討議の場としても有益に機能してきた。

第4回シンポジウムは平成20年2月16日に池袋ワールドインポートマートで開催された（図1）。前3回がどちらかといえば参加各班の研究方針の紹介や一般的課題の検討に重きを置いていたのに対し、今回は本領域のテーマである「セム系部族社会の形成」研究に直接つながるような個別成果の報告が多く盛り込まれた点に特徴がある。それには、平成19年度から領域としての共同調査が本格的に始まったことが大きな要因になっている。調査の舞台となっているのは、ビシュリ山系の北に位置するユーフラテス河畔の青銅器時代遺跡ガーネムアリ、ならびにその周辺地域である。

当日は、領域代表者である大沼克彦（以下、敬称略）がガーネムアリ遺跡発掘を含むこの一年の活動概要を報告した後、ビシュリ山系の自然と文化、セム系民族の生活と文化、文献・考古資料からみた部族という三つのセッションに分けて全部で13本の研究発表がなされた。総括班のシンポジウム担当として以下、内容を報告したい。

## ビシュリ山系の自然と文化

このセッションでは調査地であるビシュリ山系の自然環境や住人の文化的背景にかかわる成果が報じられた。まず松本健がガーネムアリが位置するユーフラテス河中流域地形の画像解析結果について述べた（計画研究A13）。この班はシリア・メソポタミアの遺跡データベースの構築を主たる目的としているが、その構築にあたって駆使している高解像度衛星画像がガーネムアリ周辺の古地形を解読するのに有益であること

を示したものである。

ユーフラテス河が過去に幾度も河道を変えていること、ガーネムアリなど河畔定住地は洪水にさらされていた可能性があることが述べられた。また、南メソポタミアと比較して可耕地面積が小さいことなどからみて青銅器時代の集団は農地経営のみでは都市社会を

営めなかったのではないかと、都市を維持するには周辺集団との交易が不可欠ではなかったかの示唆が提示された。この点は、ガーネムアリの発掘成果によって十分検証できると考えられる。

一方、フィールドワークに基づいて調査地域の地形について報告したのが斎藤毅である。名古屋大学の星野光雄が主宰する自然史班の成果の一部として、ガーネムアリ周辺の段丘調査の成果を述べた（計画研究A08）。ユーフラテス河畔には少なくとも五つの完新世段丘が形成されていること、遺跡が営まれているのは最低位段丘上であることが説明された。また、その段丘上には他に微高地が認められることから、最初の住人たちも同段丘の微高地を占地した可能性があることなどが述べられた。加えて、第三段丘面には天然アスファルトを産出する地点が存在することが見いだされたという。星野の班ではアスファルトだけでなくプリントなど先史時代住人にとって不可欠な資源の分布調査も計画されている。今後の展開、他におこなわれている考古班の踏査結果との照合が期待された。

常木晃の演題は、平成19年度秋に実施した現ガーネムアリ村の民族考古学的調査について報告するものであった（計画研究A04）。住人の聞き取り調査をもとに、彼らの出自や集団構成、また当初は同じ墓地を利用していたが、やがて家系ごとに異なる墓地を設けるようになったことなどの新知見が披露された。その



図1 第4回シンポジウム案内リーフレット表紙

ような行動が歴史的にどこまで遡って認められるかは当然、部族社会の形成という本領域研究のテーマと密接にかかわる問題である。常木が民族調査とあわせて実施した遺跡踏査によれば、ガーネムアリと目と鼻の先にあるワディ・ダバ周辺で青銅器時代の墓地が見つかり、それは過去のガーネムアリ住人の墓地と考えて間違いなからうとのことである。なお、報告終了後の総合討論において、その墓地を本プロジェクトで発掘することが確認された（図2、3）。

以上は青銅器時代ガーネムアリ遺跡に関わる研究報告であるが、午前中最後の西秋の発表はそれ以前の集団に目を向けた。ビシュリ山系西南のパルミラ盆地やユーフラテス中流域で実施してきた調査ならびに平成19年度におこなった踏査の結果にもとづいて、新石器時代の初期遊牧民がビシュリ山系に進出した経緯や、彼らが河畔の定住集団との間に築いた社会関係について整理してみた（計画研究A02）。明らかなのは遊牧民の本格進出が先土器新石器時代末には始まっていたこと、間もなく故地たるユーフラテス河流域の集団とは異なる生活技術を採用し始めたことである。また、彼らの進出がそのままアスファルト、フリントなどビシュリ山系の特産品をユーフラテス河畔にもたらすことにつながったとは考えにくいこと、その後、遺跡が減少することから見て新石器時代遊牧民が青銅器時代のセム系集団の祖先集団であるかどうかは即断できないことも述べた。

## セム系民族の生活と文化

午後から開始されたこのセッションは、ビシュリ山系に限らず西アジアに広く展開するセム系集団の形質、あるいは彼らに独自の生活文化を改めて定義しようとする研究を集めて構成された。発表は古人骨研究を扱う石田英実班（計画研究A09）の荻原直道の報告から始まった。1980年前後に国土館大学がおこなっ

たイラク、ハムリン地域の発掘で得られた古人骨標本の形態学的形質を三次元解析し、その年代の変遷が明らかにされた。古バビロニア以降イスラーム期までの頭蓋の形態変化を追跡したところ、長頭から短頭へという変化が確認できたという。本プロジェクトに最もかかわるメソポタミア古バビロニア集団の出自を調べるには、それ以前の内外の集団との関係を調べる必要があるが、ハムリンからは良好な先史標本が得られていないとのことであった。

本郷一美は考古遺跡から出土する動植物遺存体の分析に基づき西アジア先史時代集団の生業基盤について説明した（計画研究A10）。要はムギ・マメ類の栽培と偶蹄類の飼育であるが、新石器時代におけるその成立以降、家畜飼育に特化した集団が出現したり、さらには特殊な品種改良がおこったりするなど、都市社会成立前夜に向けて内実は変化していったことが示された。ガーネムアリ遺跡出土の植物遺存体についても概要がふれられた。

続く岡田保良はユーフラテス河中流域の古代建築について述べた（計画研究A11）。特に焦点があてられたのは、当地集団に固有な伝統的建築様式であるコッベとよばれる建物のルーツについてである。その起源はいまだ明らかでないものの、ガーネムアリで見つかった土台が正方形をなす建築遺構は、その可能性があるかも知れないので検討が必要だとの指摘がなされた。また、宮下佐江子はローマ時代のパルミラで多数出土しているテッセラという小形の札状遺物について報じた（計画研究A12）。パルミラでしか知られていない特殊遺物であるという。神殿で実施された宗教的宴会時に配布された食料引換券であろうとされるが、一体、どんな経緯をもってそのような物品の使用がパルミラ集団の間で始まったのか興味深い。いずれにしてもこれらの問題はガーネムアリの発掘成果だけでは解決できないものであり、各班独自の調査が計画



図2 ガーネムアリ遺跡周辺のユーフラテス河畔平野とビシュリ台地（撮影：木内智康）



図3 ガーネムアリ遺跡周辺の古代墓地（撮影：木内智康）

されねばならないと思われた。

#### 文献・考古資料からみた部族

最後のセッションは「部族」について文献史的、考古学的に検討する発表である。まず、佐藤宏之が考古学で採用されている部族社会認定の基準につき整理し、旧石器時代遺跡で部族がとらえられるかどうかという課題に言及した（計画研究 A01）。佐藤によれば、部族社会はいわゆる分節社会の一種ととらえるべきであり、その存在は領域の占有、シンボルの共有を示す証拠の有無によって検討できるという。石器の地域性や、副葬品・装飾品など集団ないし個人のアイデンティティにかかわる証拠は旧石器遺跡にも散見されることから、当時既に何らかの分節社会が誕生していた可能性があるとのことであった。ただし、その性質は新石器時代以降に想定される食料生産民の部族社会とは異なるものであったであろうとの但し書きもつけられた。

次いで粘土板文書の解読にかかわる二本の研究報告がおこなわれた。前川和也が報じたのは前3千年紀のメソポタミアを起源とするシュメール語彙リストが、すみやかにシリア地方に拡散した現象についてである（計画研究 A06）。また、1月29日に前川の班が京都大学で開催した研究会では部族制度に関する、より直裁的な報告がなされたという紹介もなされた。一方、前2千年紀の文書解読結果について述べたのが沼本宏俊、山田重郎である（計画研究 A05）。シリア東北部タバン遺跡から出土した古バビロニア期の粘土板に遊牧部族のリーダーらしき人物の名前が記載されていること、彼らは定住民と異なった信仰をもっていたらしいことなどが判明したとのことである。生活様式や価値観を異にする部族が遅くとも前2千年紀初めには出現していたことを示すもので、考古学的に検証すべき地域史の一側面が提示されたというべきであろう。

続く高浜秀の発表は、西アジアから離れて中央アジア・モンゴル平原の青銅器・鉄器時代遺跡を概観し、そこに展開した初期騎馬遊牧民が部族認定を可能とするような遺構を残していることに言及するものであった（公募研究01）。列をなす古墳群や積み石、石堆群、さらには鹿石群など集団や家系のマーカーになると思われる事例が多々あることが紹介された。高浜の研究班は平成18年度に加わった公募班であり異なる地域を扱うものではあるが、参加各班に西アジア遊牧民の墓制と類似点が多いことに改めて気づかせるに十分な報告であった。

最後に、藤井純夫が西アジア内陸部のケルン墓分析

から、「遊牧部族の形成」について探った（計画研究 A03）。銅石器時代から青銅器時代にかけてのヨルダン地方ケルン墓の構成変遷を検討してみると、被葬者層の拡大や墓の等質化など後世につながる質的な変化が生じるのは銅石器時代末であり、そのあたりに部族社会成立を読み解くカギがありそうだとの見通しであった。銅石器時代末といえ、メソポタミアのウルクに代表されるように定住民集団にとっても社会の複雑化が進展したとされる時期である。藤井の見通しが正しいのであれば両者は時期的に一致するのであり、定住民と遊牧民の社会変化の連動メカニズムにつき今後説明していく必要があると思われた。

これらの発表の後、藤井、大沼の司会進行によって総合討論にはいった。議論されたのは以下の二つの点である。一つは、本プロジェクトの中核的共同研究である青銅器時代遺跡ガーネムアリをめぐる集団関係についてである。すなわち、前2千年紀始めには出現していたことが文献から判明している遊牧集団と定住集団との接触が、前3千年紀後半の遺跡においても認められるのか、またどう分析すればそれが把握できるのかという問題。もう一つは、青銅器時代におけるそうした社会情勢が出現した経緯に関する問題である。新石器時代終わり頃に遊牧民と定住民という生業を異にする集団が現れていたことはほぼ認めうることであるが、両者の関係を以後、青銅器時代まで具体的にたどることは現状では難しい。内陸砂漠では僅少とされる銅石器時代の遺跡を野外踏査でどう見つけたらよいかなど、調査戦略の問題を含めて意見がかわされた。

おわりに

以上、多岐にわたる論点が提示された盛りだくさんのシンポジウムであったが、セム系部族社会の形成研究に貢献する有益な知見がいくつも提示され、なかなか充実した一日であったと感じた。発表者、参加者の方々にまずは厚くお礼申し上げたい。

各班から具体的な成果が出始めた現在、会の主催者たる総括班にいつそう求められるのは、提起される多様な論点を整理し方向付けしていくことである。今回の総合討論では青銅器時代における複数の「部族」ないし集団の共時的関係と、そこにいたるまでの先史的経緯という二つの視点から整理された。時間の都合もあってのことであるが、今後、本シンポジウムあるいは共同研究をより実りあるものとするために必須であろうと評者が感じたのは、青銅器時代を逆からみる視点である。すなわち、現代ないし歴史時代から得られる証拠をもって青銅器時代を議論することが今回は

できなかった。過去を考えるのに現在に関する知識が不可欠なことは言うまでもない。部族社会の形成過程を調べる本プロジェクトにとって、その到達点たる現在の部族社会の性状を十分に理解しておくことは必須である。我々はどんな社会を青銅器時代ビシュリの考古、物質資料に見いだそうとしているのだろうか。また、その見通しは裏付けがあつてのことなのか。現在見る部族のありようは変遷をたどった末にたどり着いた歴史的産物であろうとはいえ、その咀嚼無しに過去を見つめるのは不可能である。

もちろん、本領域研究では部族を専門とする人類学者、歴史学者をまじえて数度の研究会を開催し、共通の理解を深めてはきた。また、次年度からは公募研究として現代部族を扱う人類学研究班が加わる予定であるからなおのこと心強い。とはいえ、この問題は人類学者に全てまかせてよい性質のものではない。人類学者が定義する現在の部族あるいは部族社会は、もっぱら現地住人たちへの聞き取りの結果や歴史記録の分析で構築されているからである。当人たちの意識や血縁

関係、記憶で定義された「部族」が、先史学が扱う物質文化や生活様式などの物的証拠に反映されているのか精査が必要であり、それをおこなうのは過去を扱う研究者側の仕事であろう。墓域や居住区割りにそれを読み取ろうとする、常木が試みたような民族考古学的調査はその貴重な第一歩であるが、一方、本プロジェクトには粘土板文書を含む歴史文献が利用できる青銅器時代以降の証拠を扱う班もいくつか参加している。それらの班にはぜひ、先史学的に検証可能な仮説なり見通しなりを提案していただきたいと思う。それを検証するための場として野外調査がおこなわれるならば、もっと実質的、効率的な成果が得られるものと思われる。

平成17年度から5カ年計画で始まった本特定領域研究も折り返し点を過ぎた。今回のシンポジウムは平成21年度末に予定されている。さらに深まった議論を提供すべく、総括班としても戦略をねりながら次回に備えたい。

#### 第4回公開シンポジウム 西アジア部族社会とビシュリ山系

日時：2008年2月16日（土）10：00 - 17：00

会場：ワールドインポートマート コンファレンスルーム Room 6

主催：特定領域研究「セム系部族社会の形成」総括班

##### プログラム

10:00 趣旨説明 大沼克彦

##### 【基調報告】

10:10 2007年度ビシュリ山系の総合調査 大沼克彦（国土館大学教授）

##### 【ビシュリ山系の自然と文化】

10:30 メソポタミアにおける考古遺跡のデータベース化の研究 衛星画像解析による探査法  
松本 健（国土館大学教授）

10:50 ガーネム・アリ周辺に発達する河岸段丘と微地 齊藤 毅（名城大学准教授）

11:10 ガーネム・アリ村の歴史 常木 晃（筑波大学教授）

11:30 新石器時代のビシュリ 西秋良宏（東京大学教授）

11:50 - 13:00 昼食

##### 【セム系民族の生活と歴史】

13:00 北メソポタミア・ハムリン遺跡群出土頭蓋骨の3次元形態変異とその時代的変遷  
荻原直道（京都大学助教）・巻島美幸（京都大学教務補佐員）・石田英実（滋賀県立大学教授）

13:20 セム系部族社会の生業基盤 本郷一美（総合研究大学院大学准教授）

13:40 ユーフラテス河中流域の古代建築遺構 岡田保良（国土館大学教授）

14:00 パルミラのテッセラについて 宮下佐江子（古代オリエン特博物館研究員）

##### 【考古・文献資料からみた部族】

14:20 旧石器時代に“部族”の可能性を探る 佐藤宏之（東京大学教授）

14:40 - 15:00 休憩

15:00 シュメール“語彙リスト”のシリアにおける受容 前川和也（国土館大学教授）

15:20 テル・タバン出土文字資料から見た部族 沼本宏俊（国土館大学教授）・山田重郎（筑波大学准教授）

15:40 初期騎馬遊牧民の考古学からみた部族 高浜 秀（金沢大学教授）

16:00 遊牧部族の形成 カア・アブ・トレイ八西遺跡におけるケルン墓造営集団の分層化  
藤井純夫（金沢大学教授）

##### 【総合討論】

16:20 - 17:00 ビシュリ山系に西アジア部族社会の起源を探る 司会：藤井純夫

# テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の測量調査

長谷川敦章（筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科）  
計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」研究協力者

## 1 遺跡の立地と周辺の環境

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ユーフラテス河に沿うように東西にのびる幹線道路をラッカ市街から東へ約50km進むと北側に見えるテル型遺跡である（写真1）。周辺には、この遺跡より西へ約6kmに同様のテル型遺跡であるテル・ハマディーンが、南へ約1kmの台地縁辺部には、アブ・ハマド遺跡をはじめとする墓地遺跡群が存在している。また、南西へ約1.5km、幹線道路より南の丘陵地には、この遺跡の名前の由来となったガーネム・アル・アリ村がある。

当該遺跡は、ユーフラテス河南岸から2.5kmほど南に位置し、現在少なくとも5段が確認されている段丘面の最低位に立地している<sup>1</sup>。この最低位段丘面には比高1mほどの三日月形や帯状の微高地が認められ、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡やテル・ハマディーン遺跡はこのような微高地の上に形成された可能性が



写真1 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡（幹線道路から撮影）



写真2 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の南側、建設現場（北より撮影）

指摘されている（齋藤 2007）。

## 2 遺跡の現状と測量調査

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の東側には南北に農業用水路がのびており、遺跡周辺は、大半が小麦畑を中心とした耕作地として利用されている。また、遺跡の南側に隣接して、大規模な建物が建設中である（写真2）。さらに、南西側周辺には、コンクリート塊や鉄筋コンクリートによる基礎などが散在しており、現代の建築物の痕跡を認めることができる。遺跡の現状として最も留意すべき点は、テル頂上平坦面の大部分に、現代イスラムの墓地が築かれていることである（写真3）。これは、遺跡近郊のガーネム・アル・アリ村の共同墓地であり、少なくとも1990年代まで、村人は全てここに葬られていたようである（常木2007）。しかし、テル頂上部の縁辺付近やテルの斜面は、目立った土地利用はされておらず、荒地である。ただし、テル頂上部南西隅は、墓地の端から大きく削れており人為的改変を受けていると思われる。

測量調査は、2007年5月17日から27日にかけて実施した。日本側メンバーは、大沼克彦（日本側調査団長・国士舘大学）、宮下佐江子（古代オリエント博物館）、長谷川敦章（筑波大学博士課程）、木内智康（東京大学博士課程）、赤司千恵（早稲田大学修士課程）またシリア側メンバーは、Anas Al-Habour（シリア側調査団長・シリア国立ラッカ博物館）、Ayham Al-Fahry, Mahmmud Al-Hassanが参加した。



写真3 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡頂上平坦部、現代イスラムの墓地（北より撮影）

測量にあたっては光波トランシットを使用し、基準点を設定後、地形の地性線に沿った測点の座標、水準の測量を行い、成果を展開して等高線を描き、諸地物を記入する方法をとった。測点の展開と図化に関しては、(有)三井考測三井猛氏に一方ならぬ御協力を賜ったことに厚く御礼申し上げたい。

本調査では、テル・ガーナム・アル・アリ遺跡頂上部に設置されていた基準点<sup>2</sup>を原点 (X=0, Y=0) とした任意座標を用いた。この基準点では標高値が確認でき、その数値は238.958mである。X軸の方位は、原点から視準可能な範囲に三角点が全く存在しなかったため、磁針標定による南北方向とした。計曲線は1m、

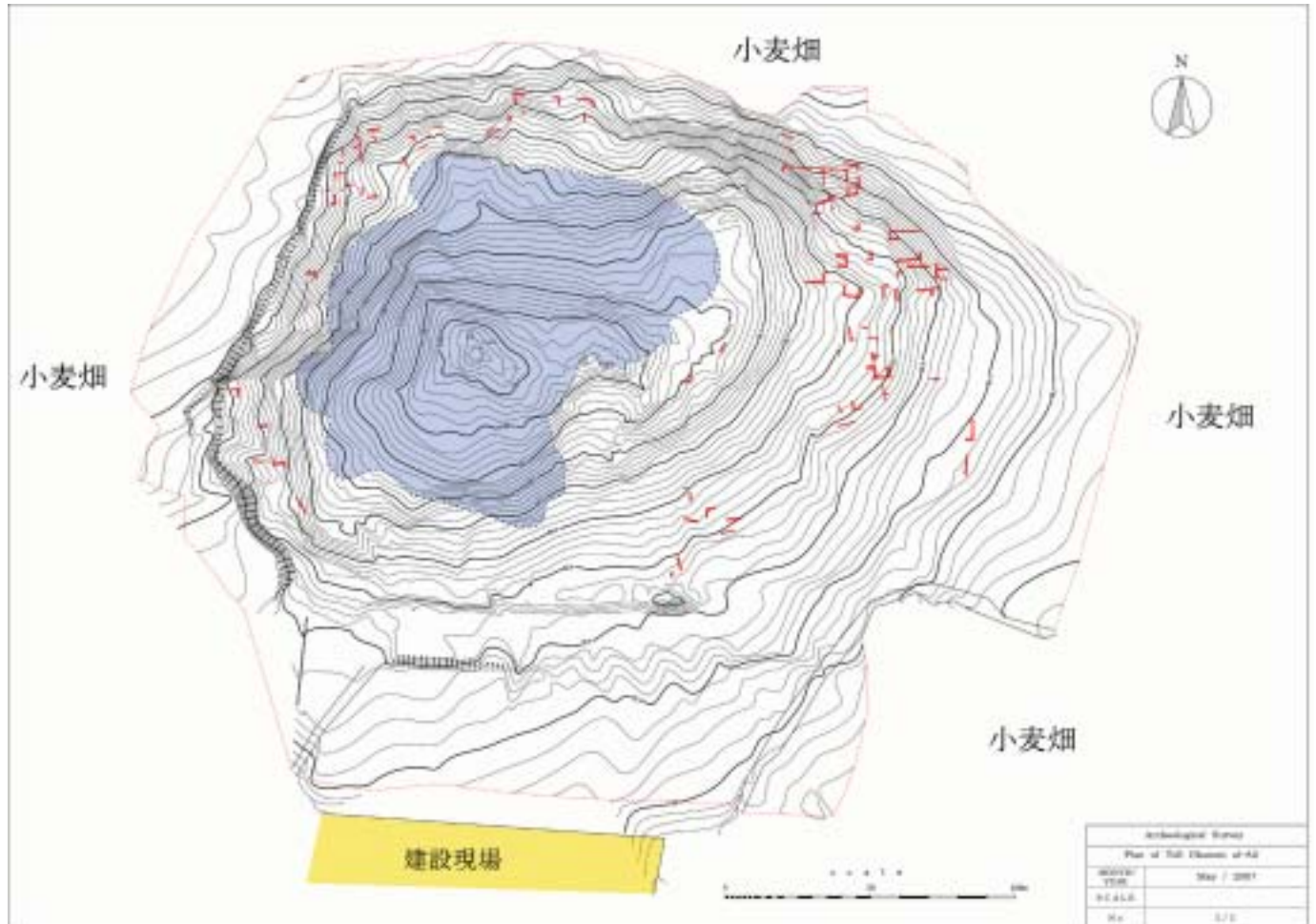


図1 テル・ガーナム・アル・アリ遺跡測量図：青く示している範囲は現代イスラムの墓地；赤いラインは、地表面で確認できる遺構の痕跡



図2 テル・ガーナム・アル・アリ遺跡衛星写真 (Google Earthより) と測量図の合成図



写真4 テル・ガーナム・アル・アリ遺跡西側斜面、人為的掘削と整地面 (北より撮影)



主曲線は20cmである。遺跡の周囲は、建設中の建物がある南側を除いて、耕作地との境界に土塁を設けている。本調査では、南側は建設現場の北端まで、それ以外は土塁の内側までを測量範囲とした<sup>3</sup>。

### 3 調査の成果（図1、2）

#### 本調査から得られた規模と形状

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡では、裾部分の西側と南側に人為的な地形改変の痕跡が確認できた。本来の地形を比較的維持しているのは、北側及び東側である。北側斜面が急勾配であるのに対し、東側斜面の勾配は緩やかである。また両斜面の傾斜の変化から考えて標高230.0m付近が、測量から確認できうる遺跡の裾と段丘面の境界であり、裾との比高は約10mであると思われる。ただし、遺跡の規模を知るためには、丹念な遺物表採や発掘調査を行わなければならないことは言うまでもない。また、ユーフラテス河の度重なる流路変更等による土砂の堆積があり、遺跡が部分的に埋没している可能性も考えられる。上述した遺跡の端部は、あくまでも地形測量からの知見であり、今後の調査成果を充実させることによって、精確さを高めていくことが期待されよう。

テル西側斜面は、北側斜面と同様に急勾配であるが、標高231.0m付近から大規模な掘削を受け、平坦に整地されている（写真4）。現在この整地面は、農作物の天日干しなどに利用されている。テル南西側及び南側は、前章で述べたように現代の建築物によって遺跡が破壊されている。また南東側も、上述した遺跡の東側裾である標高値230.0mを目安に考えると、耕作によって、部分的に地形改変をうけていると思われる。

以上を考慮に入れると、現状におけるテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の規模は、南北方向約250m、東西方向約290mである。

#### 地形図から読みとれる旧形状および規模

ラッカ県におけるユーフラテス中流域は、1961年から1962年にかけてイタリアの測量会社により、縮尺5,000分1の地形図が作成されている<sup>4</sup>。この地形図に描かれているテル・ガーネム・アル・アリ遺跡と本調査の成果を比較し、遺跡の規模について考えてみたい（図3）。地形図からは、西側と南側を中心とした大規模な地形改変がなされる以前の形状を窺い知ることができる。最も大きな違いは、地形図では南側に大きく張り出した形状が確認できる点である。本調査中、遺跡の南に隣接する建設現場にタノールらしき焼成遺構が複数あったとの情報を、周辺住民から得ることができた。

これらの情報をあわせて考えると、地形図から読み取れる遺跡の平面規模の最大長は南北方向約450m、東西方向の最大長は約380mとなる。現状と比べると、南に約200m長い可能性があり、より大きかったと考えられる。以上のことより、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の平面プランは、現在東側に少し張り出した東西に長軸を持つ歪な卵形をしているが、1961年当



図3 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡（縮尺5千分1の地形図より）

時は、南側に大きく張り出した逆三角形を呈しており、後者の形状が、より実態に近いと考えられる。

#### テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の地形的特徴

地形測量により、以下に述べる二つの大きな特徴を確認することができた。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の地表面を観察すると、部分的に露出している石列（写真5）や、明らかに人為的なラインが周囲とは異なる土色で認められる（写真6）。これは当該遺跡の最大の特徴である。前者は、直線、コの字形、L字形に礫が並ぶことから、



写真5 地表面に露出する石列（北西より撮影）



写真6 地表面で確認できるL字プラン（北西より撮影）



写真7 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡北西隅、地表面に露出する石膏による石列（北東より撮影）

石壁の一部やその基礎である可能性が考えられる。また後者である土色の違いによるラインも、同様なプランを有する。すなわち地下に埋没した遺構が存在するため、地表面の含水率が他と異なることにより土色変化していると思われる。つまり、両者とも建築遺構の痕跡であると推察される。

これらの痕跡は、遺跡の各地点から確認されているが、特に北西隅及び北東隅に集中して分布している。それに対し南側斜面では、明確ではなかった。北西隅における痕跡は、大型の石膏を利用した石列が多いのが特徴である。（写真7）

テル頂上平坦部は、前章でも述べたように現代イスラムの墓地となっている。しかし、その東側は、利用されている範囲が比較的狭い。ここで確認されている遺構の痕跡は、標高値237.0m付近に位置し、現在確認しうる最も標高の高い地点である。この地点を最高点として遺構の痕跡が分布する。また東側斜面では、標高値230.6mから230.8mの間で直線のラインが確認されている。これらの痕跡は現在確認されているなかでは、最も低い地点に位置する。このことは、遺跡の範囲が、東側では少なくとも標高値230m付近までであると考える傍証となる。つまり、標高の幅としては、237.0mから230.6mの間に分布しているのである。以上が第一の特徴である。なお、テル頂上平坦部全体にこれらの痕跡は存在していたと思われるが、ほとんどの部分が墓地で壊されており、テル西側および北側は斜面までが墓地として利用されている。そのためこのような痕跡の全体像を把握することは困難を極めると予測される

第二の特徴は、テル南側斜面の標高値232.6m-233.0m付近、標高値231.8m-232.2m付近に、ほぼ平行して東西に伸びる二つの段の存在である。前者の段は部分的にわずかであるが石組みが露出している部分がある（写真8）。1961年に作成された5,000分1の地形図においても、テル南側斜面中腹部にほぼ東西に平行して伸びる等高線を確認することができる。これらの地形変化は、周壁の存在を示唆している可能性がある。

#### 4 まとめ

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ユーフラテス河の最低位段丘面に立地し、微高地の上に形成されている。5,000分1地形図を見てみると、遺跡のすぐ北側にも三日月形の微高地がある。これらはユーフラテス河の流路変更によって形成されたと思われ（齋藤2007）。現在よりもユーフラテス河の流路が遺跡に近接していたことを示している。それがいつの時期のこ

とであるのかは、現段階では不明であるが、遺跡の居住時期とユーフラテス河の流路の関係には注意が払われる必要がある。

西側と南側に大規模な地形改変を受けているこの遺跡は、現状では約7haであるが、1961年の地形図をみると当時は南側に大きく張り出した逆三角形を呈し、約12haであった。ユーフラテス河中流域では、テル・ピア、テル・ハディディ、テル・エッ・スエイハットなどの遺跡のように、40haを超える規模の遺跡が存在する。一方で、セレンカヒエ遺跡やハラワA遺跡のように10-15haの規模の遺跡も存在する。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、後者に属する規模である。ユーフラテス河中流域における当該遺跡の位置づけを考える際に、これらの遺跡との比較検討が必要となるであろう。

今回の測量調査では、遺跡の北側を中心に分布している建築遺構の存在を示す痕跡を、十分に記録できたとは言いがたい。さらに詳細に調査することにより、発掘することなく部分的に街区等を確認できるかもしれない。しかし、テル頂上部の大部分は現代イスラムの墓地であるため、全体像を把握することは容易ではない。また、南側斜面には、周壁の可能性がある段が東西に伸びている。

測量調査で判明した、当該遺跡における二つの特徴的な地形の調査も含め、2007年度に2度にわたる発掘調査を行った。遺構の痕跡の調査は、それが明確に残っている北東隅と北西隅において、埋没する遺構の構造と帰属時期を解明することを目的とした。またテル南側斜面の東西に伸びる二つの段の調査は、特に南側の段が後世の改変によるものなのか、それとも周壁のような何らかの遺構を反映しているものであるのかを確認することを目的とした。これらの成果を含む発掘調査概報の詳細は、別稿を参照していただきたい(長谷川・木内・根岸・大沼 2007)。

#### 註

1 筆者はニュースレター No.6 の拙稿にて、ジャバル・ビシュリ周辺の地形を地理的特徴から大きく4分類し、第一地域を広義の氾濫原として表記した。しかし、星野光雄教授を中心とした計画研究班の現地調査の進展により、筆者が第一地域として扱った地域は、狭義の氾濫原と5段の段丘面とに分類できることが明らかとなった。本稿では、この研究成果に基づいて記述を行いたい。



写真8 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡南斜面、部分的に露出する石組み(南より撮影)

- 2 一辺50cmほどの方形を呈したコンクリートの基礎の中央に直径10cmほどの孔が穿たれている。「PT588」と刻まれており、ラッカ市内の土地開発局で確認したところ、おそらく標高値が238.958mであることが判明した。
- 3 測量図では土塁の内側と建設現場との境界線を破線で表現している。
- 4 Euphates Project Authorityにより刊行。調査終了直前にラッカの土木局にてコピーを入手。等高線の間隔は1mである。作成にあたり航空写真測量の技術が使用されている(後藤・長谷川 2007)。

#### 参考文献

- 後藤智哉・長谷川均2007「ソビエト軍製地形図を利用したテルの分布調査 シリア・ユーフラテス河中流域を対象として」『セム系部族社会の形成』Newsletter No.3, 16-19.
- 齋藤 毅 2007「ガーネム・アリ周辺に発達する河岸段丘と微地形」公開シンポジウム『西アジア部族社会とビシュリ山系』発表資料。
- 常木 晃 2007「ガーネム・アル・アリ村の歴史」公開シンポジウム『西アジア部族社会とビシュリ山系』発表資料。
- 長谷川敦章・木内智康・根岸洋・大沼克彦2007「農耕と牧畜のはざまに ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落 シリア、ビシュリ山系テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の2007年度発掘調査」『平成19年度 考古学が語る古代オリエント 第15回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 62-69.

## 中期アッシリア アッシリアの誕生

柴田大輔（日本学術振興会海外特別研究員、国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員）  
計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」研究協力者

はじめに 研究課題としてのアッシリア

アッシリアという名前は日本でも人口に膾炙している。現在のイラク北部とシリア北東部に相当するメソポタミア北部を中心に前二千年紀から前一千年紀にかけて栄えた古代国家のことである。またこの古代国家

アッシリア帝国 の中心部となった地域のことでもある。そして、そこに花開いた文明を一般にアッシリア文明と呼ぶ。

メソポタミアとはもちろんチグリス川・ユーフラテス川流域を指す呼称だ。メソポタミア文明という名は中学校社会科の教科書にすら登場する。ただし、このメソポタミアという呼称は同地域が地理的に均質であるかのような印象を与えるが、事実は全く逆である。メソポタミアと一括りにされる地域内の気候は様々であり、そこには多様な生態系が入り混じっている。特に、メソポタミア北部と現在の南イラクに相当するメソポタミア南部の気候が全く異なること、両地域がメソポタミア文明の時代においても異なる環境にあったであろうことはしばしば指摘される通りである。さらに、この相違は地理の問題に留まらず、そこに生きた人々の生業にも大きく影響したと考えられている。例えば、南と北では農業の方法、さらに栽培される作物の品種も大きく異なっていたことが知られている（Postgate 1992）。

アッシリアは、メソポタミア南部に位置するバビロニアの延長線上に位置づけられがちだ。しかし、両者を育んだ風土の差異はそのような視点に疑問を呈す。さらに、アッシリアは、バビロニアが直接は境を接していない北のアナトリア地方や西のシリア地方と隣接している。アッシリア・バビロニア間に密接な交流があったことに疑いはないが、アッシリアは同様の交流を北方や西方とも持っていた。このような状況のもとアッシリアにおいて独自の社会システム、独自の伝統が構築されていたとしても不思議ではない。

これまでのニュースレターですでに紹介されてきた通り、計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」（研究代表者：沼本宏俊）はこのアッシリアを研究対象にしている。そして、その計画研究の柱となっているのが、研究代表者沼本宏俊氏の

指揮のもと現在実施されているテル・タバンの遺跡発掘調査である。既に同氏が本ニュースレターにおいて報告している通り、シリア北東部ハブール川中流域に位置するこの遺跡からは多数の楔形文字資料が発見されている。これまでに発見されたのは、前二千年紀前半の古バビロニア文書、そして前二千年紀後半の中期アッシリア文書である。これらの文書は同遺跡が古代のタバトゥ（ム）市 前二千年紀前半ではタバトゥム、後半以降はタバトゥ、もしくはタブトゥ、タベトゥであったことを証明した。

発見された文書のうち、筆者は中期アッシリア文書を担当している。このエッセイでは文書の背景となる中期アッシリアという時代を紹介したい。特に、アッシリアの歴史におけるこの時代の重要性を再考する。その上で、テル・タバンの出土文書がもたらすアッシリア史研究の新たな可能性について論じたい。

「古」「中」「新」

中期アッシリアという用語はほとんどなじみのない言葉だろう。古代西アジア研究者でも、この用語から何かを具体的にイメージできる者はごくわずかしかないのではなかろうか。

「中（期）」とは時期を示す表記で、「古」と「新」に対応する。この二つの間に挟まれた時代が「中」であり、古アッシリア、中（期）アッシリア、新アッシリアがある。これは英語のOld Assyrian、Middle Assyrian、Neo Assyrian等の訳語だ。何故か「中」のみ「中アッシリア」ではなく、「中期アッシリア」と表記されることが多い。本稿でもこの慣例に従う。現在、これら三つの言葉はアッシリア史の時期を示す用語として用いられる。ごく大雑把に言うと、古アッシリアが前二千年紀前半、中期アッシリアが前二千年紀後半、そして新アッシリアが前一千年紀前半である。しかし、これはもともとアッシリアで使われた言語アッシリア語、あるいはアッカド語アッシリア方言 に関する用語であった。これまで発見されているアッシリア文書は実は特定の時代に偏っている。前19世紀頃（古）、前14世紀から前11世紀（中）、そして前一千年紀前半（特に前8世紀から前7世紀）（新）

だ。「古」「中」「新」はこれら三つの文書コーパスの言語的特徴を表す表現である。日本語にするなら、古アッシリア語、中期アッシリア語、新アッシリア語だ。この用語が政治史や文化史の時代区分に転用されたのである。ただし、あくまで便宜的な表記であるため、例えば「中期アッシリア時代から新アッシリア時代に交替したのは厳密にいつか？」などこの時代区分を実体化して考えることは慎む必要がある。

さて、三つの時代表記の中で最も印象が弱いのは「中」であろう。「古」は最古の時代であり、言うなれば起源の時代である。一方、「新」は最盛期と滅亡の時代である。間に挟まれた「中」はいかにもどうでもよい時代だ。アッシリア史を少し学ぶと、この印象は払拭されるどころか、ますます強くなってしまふ。

三時代の中で最もインパクトが強いのは言うまでもなく「新」である。アッシリア帝国が西アジア世界に覇を唱えた最盛期だ。シャルマネセル三世、セナケリブ、アッシュルバニパルと言った有名な王達の下、カルフ市やニネヴェ市に壮麗な宮殿が築かれ、そこには我々が「アッシリア」という言葉で真っ先に思い浮かべる美術作品のレリーフや巨像が飾られた。旧約聖書に登場するアッシリアも専らこの時代のアッシリア帝国のことである。

この「新」に比べるといささかマイナーだが、「古」の方もメソポタミア史を学んだ者の記憶に印象深く刻まれる。後にアッシリア本土になる北メソポタミアから古アッシリア文書はさほど見つからないが、アナトリアからこの時代に由来する莫大な量の文書が発見されている。大半は現在のカイセリ市近郊に位置するキュルテペ遺跡（古代のカニシュ市）から発見されたものだが、日本隊が調査するカマン・カレホック遺跡からも二点発見されている（Michel 2003）。内容はアッシュル市からやって来たその頃（前19世紀頃）のビジネスマン、アッシュル商人（いわゆるアッシリア商人）が残した記録だ。この時代、メソポタミアから北シリア、アナトリアに広がる広大な交易網がアッシュル商人によって展開されていた。これは、メソポタミア史の中でも最も詳細な記録の残る商業活動の一つである。これに加え、前18世紀北メソポタミアで覇権を握った王サムシ・アッドゥ（シャムシ・アダド一世）がいる。若きハムラビを苦しめたこの霸王も俗に古アッシリアの王として認知される（この問題は後でまた言及する）。

これら「新」と「古」に比べると「中」のインパクト不足は否めない。では、アッシリア史において中期アッシリア時代とは重要性に欠く時代なのだろうか。

否。実は、この時代こそアッシリア帝国の基礎が築かれた時代であり、そもそも我々がアッシリアと呼んでいる地域が「誕生」した時代でもある。読者の中にはこの言明に違和感を覚える方もいるかもしれない。「中」は最古の時代ではない。その前に「古」がある。アッシリアが誕生したのは「古」の時代ではないのか。当然の疑問であろう。結論から先に言うと、領域国家アッシリア、そして地域としてのアッシリアが成立したのが中期アッシリア時代なのである。

アッシリアとは？

多少迂遠な印象を与えるかもしれないが、まずアッシリアと我々が呼んでいるものの実状を整理したい。歴史的に見ると、我々がアッシリアと呼んでいる国家はチグリス川沿いに位置する都市アッシュルを源泉としている。アッシュル市はアッシリア帝国の中心だ。前一千紀、アッシリア王とそのハーレムが居住する王宮が別の都市　カルフ市、そしてニネヴェ市に建設された後も、アッシュル市はアッシリアの「中心」であり続けた。第一にアッシュル市には、アッシリアの国家神でありこの都市の神格化あるいはアッシュル市の山の神と考えられている同名の神　アッシュル神　を祀るエシャラ神殿があった。この神殿を中心に執り行われた年間祭儀に参加するため、アッシリア王は前一千紀にも度々この都市を訪れなくてはならなかった（Maul 2000; Menzel 1981）。そして、他の王族がその時々宮殿の地下に埋葬される中（例えばカルフの王族墓）、アッシリア王だけは、アッシュル市の「古い宮殿」内に築かれた祖王達の眠る王墓に葬られた（Andrae 1977）。このアッシュル市の歴史は中期アッシリア時代以前、少なくとも前三千年紀に溯る。問題は我々がアッシリアという名で呼んでいる地域だ。

現在我々が使っているこのアッシリアという語はギリシャ語に由来するが、語源をたどって行くと「アッシュルの地」（*māt Assur*）というアッカド語の表現に溯る。我々はアッシリアという用語を第一にこの「アッシュルの地」の訳語として用いている。「アッシュルの地」とは、アッシュル市が都市国家の枠組みを超え領域国家になった後、その領土を指す言葉として生まれたものだ。アッシュル市から起こった支配組織の属領になり、アッシュル市の社会制度が導入された地域、言わばアッシュル化された地域である。祭儀的に見ると、アッシュル市のアッシュル神祭祀の輪番制に組み込まれた地域であり、神学的にはアッシュル神の所有する土地だ（Postgate 2007）。ただし、この「ア

「アッシュルの地」が指す地域は時代によって変化した。

「アッシュルの地」という当時の概念を考慮しつつも、我々は、我々の視点に基づく分析概念としてもアッシリアという地名を用いている。すなわち、アッシリア式のノ的な遺物（文書、土器、建築遺構 etc.）が出土する地域という意味である。この地域が一体何を反映しているのか、という問題は長く議論されてきた。問題は錯綜しており一概には結論づけられない。しかし、後で言及する古アッシリア時代のアッシュル商人寄留地の問題を除けば、重要なポイントの一つが各都市を支配する統治機関であることに疑いはない（Pfälzner 1997, Postgate 2007）。すなわち、統治機関における公用語がアッシュル市の言葉（アッシリア語）であり、アッシュル式の社会行政制度を基調にしている地域ということだ。

このように、アッシリアと言う地名は、「アッシュルの地」という当時の概念と、我々の視点を基準にした分析概念が融合したものである。両者の指すものが一致することも多いが、両概念がイコールという訳ではないことを常に自覚する必要がある。

これを踏まえ、先ほどの言明をより正確に言い直そう。これまで発見されている資料から知られるがぎり、「アッシュルの地」という概念が生まれたのも、我々の視点から見てアッシリアと呼び得る地域がアッシュル市のはるか外部まで広がったのも、中期アッシリア時代なのである。

古アッシリア時代にアッシリアはなかったのか？

しかし、古い概説書などには、アッシリアは前二千年紀前半に繁栄し、その後一時衰退した後に前二千年紀後半再び勢力を取り戻すと解説されることがある。前二千年紀前半、アッシュルを中心とする領域国家、アッシリアと呼べる地域が（我々の知るがぎり）存在しなかった、という言明に納得できない読者もいるだろう。キュルテペ文書などから知られるアッシュル商人の広大なネットワークがあくまで交易網であってこの領域にアッシュル市が政治的影響力を及ぼしていたのではない、ということは今や常識である。だが、シリアやアナトリアのような遠方はともかく、後のアッシリア帝国中心部となる北メソポタミアはこの時代においてもアッシリアと呼べるのではないのか、という反論があるかもしれない。確かに、メソポタミアの諸都市からも、わずかながら古アッシリア文書が出土している（Michel 2003: 131f.）。しかし、それは、キュルテペ文書などと同じように、アッシュルから来た商人に由来すると考えられている。この時代、商人寄留

区を除くと、アッシリア語はアッシュル市（とおそらくその周辺の小さな村々）でのみ使われていた言語に過ぎなかった。例えば、後のアッシリア帝国の重要都市ニネヴェ（正確にはニヌア）市の市神は「ニネヴェのイシュタル」と呼ばれるイシュタル女神だが、この女神は前三千年紀、フリ語のシャウシュカという神名で呼ばれており（Such-Gutiérrez 2003: 366）その後も前二千年紀中盤までこの神名で呼ばれることが多い（Wegner 1981）。単純化して言えば、フリ系の女神シャウシュカがイシュタル女神の化身として神学的に同一視されたのだ。前二千年紀前半、このフリ系の女神を祀るニネヴェ市で話されていた言語が第一にフリ語であった可能性は高い。アッシュル市以外の後のアッシリア重要都市が前二千年紀前半においてもアッシリア都市であったと思いつくのはいかにも早計だ。

だが、前18世紀のサムシ・アッドゥ（シャムシ・アダド一世）の帝国はどうか。これは明らかな領域国家である。この国家はアッシリアではないのか、という疑問が次に起ころう。確かにサムシ・アッドゥはアッシュル市を支配下に置いていた。その碑文にはアッシュル神も言及される。そして、後代の写本から知られる『アッシリア王名表』にもこの王はアッシリア王として記載されている。サムシ・アッドゥはアッシリア王ではないのか？ 古い概説書などにおいてこのサムシ・アッドゥの帝国はアッシリアとして解説されている。ついにこの時代、後のアッシリア帝国中央都市（ニネヴェ、カルフ、アルビル etc.）が一つの国家アッシリアの下に治められた、アッシリアという地域が成立したのだ、とも論じられている（Saggs 1984）。

しかし、1980年代以降のシリアでの発掘調査、特にハブル川上流三角州域に位置するテル・レイラン遺跡の調査は、サムシ・アッドゥの帝国にとってアッシュル市は重要ではあるがあくまで一属領に過ぎなかったこと、帝国の公用語はアッシリア語ではなく、その支配領域はまったくアッシュル化されていなかったことを証明した。実のところこのことはマリ文書を研究するフランスの学者達を中心に以前から指摘されていた。サムシ・アッドゥの出自はアッシュル市ではなくエカラトゥム市であり、同時代人に彼はエカラトゥム王として認識されていた。彼の話した言葉もアムル語であったと考えられる。それゆえ、マリ文書研究者達が主張するようにこの王の名のより正確な表記は、アッシリア語（アッカド語アッシリア方言）的なシャムシ・アダドではなく、アムル語的なサムシ・アッドゥである。そして、この王が広大な領域を支配す

るに到った後、その首都に選んだのは上述のテル・レイラン遺跡に埋まる古代のシュバト・エンリル市であった (Charpin et al. 2004, Villard 1995)。

確かにサムシ・アッドゥはアッシュル市を重視しなかった訳ではない。彼は、アッシュル市の市神アッシュル神を掲げる宗教政策をとった。彼は全世界の覇者たらんことを希求したが、そのためには、南メソポタミアの最重要宗教都市ニップル市に祀られる「神々の王」エンリル神の祭儀をその手で行うことが神学的に必須の条件であった。しかし、さすがのサムシ・アッドゥもニップル市を支配下に置くことは出来なかった。そこで、彼は、ニップル市とアッシュル市を同一視し、さらにエンリル神とアッシュル神を同一視する政治神学を構築した。言わば北のニップル市の北のエンリル神を祀ることにより彼は全世界の覇者になったのだ (Maul 1997)。すなわち、彼にとってのアッシュル市は例えばウル第三王朝の王達にとってのニップル市に相当する。しかし、アッシュル市は帝国運営の中心ではなかった。例えば、広大な帝国を治めるためサムシ・アッドゥは二人の息子 イシュメ・ダガンとヤスマフ・アッドゥを重要拠点に配置したが、それは彼の故国エカラトゥム市、そして南西の拠点マリ市であった (Charpin et al. 2004, Villard 1995)。

この王とその帝国が後代のアッシリア王にとって一つのモデルとなった可能性は高い。例えば、サムシ・アッドゥをアッシリア語化した名前 Shamshi-Adad を名乗るアッシリア王が後に何人も登場している。後代のアッシリア王はイデオロギー的にサムシ・アッドゥを自らの祖王と崇めたようだ。しかし、これをもって、彼の帝国とその領土をアッシリアと呼ぶことは明らかなアナクロニズムである。

### アッシリアの誕生

サムシ・アッドゥとその息子達の帝国が崩壊した後、アッシュル市は資料の少ない空白の時代を迎える。この時代に由来するわずかな資料を見るかぎり、アッシュル市は都市とその後背地のみを治める一地方都市国家であったようだ。南のカッシート朝バビロニアに服属していた可能性もある。そして、前15世紀には西からやって来た新たな帝国に膝を屈したようだ。

紀元前二千年紀中頃、北シリアは巨大な帝国の支配下に置かれた。フリ語を公用語とするミッタニ帝国 (いわゆるミタンニ) である。ハブール川上流三角州域に位置するワシュカンニ市 (おそらく現在のテル・ファハリヤ遺跡) を首都にしていたと考えられるこの帝国の全貌は明らかではない。帝国中央部からまだ文

書庫が見つかっていないためだ。しかし、西はアンタキヤ近郊のアアラフ市 (テル・アチャナ遺跡)、東はキルクーク近郊のヌジ市 (ヨルガン・テベ遺跡) に由来する文書は、ミッタニ帝国の勢力がこれら西方と東方の都市まで及んでいたことを示唆している。この時代、我々がアッシュル市も、近隣の都市同様、このミッタニ帝国の勢力下あるいは支配下に置かれていたと推測されている。

前14世紀前半、あるいは中盤、おそらくはアッシュル・ウバリト一世の治世、アッシュル市に転機が訪れる。アッシュル市は、ミッタニ帝国に内紛が起こった機を逃さず独立を勝ち得たのだ。勢いを得たアッシュル市はさらに近隣の地域にまで勢力を伸ばした。例えば、ニネヴェ市に由来する碑文は、後に主要アッシリア都市の一つになるこの都市の征服にアッシュル・ウバリト一世が成功したことを伝える (Grayson 1987: 115f.)。資料不足のため厳密な範囲はまだ分からないが、後のアッシリア帝国の中心部 現在のイラク北東部地域に相当するチグリス川・上下ザブ川流域

がこの時代アッシュル市の領土に組み込まれたようだ (Harrak 1987)。ついにアッシュル市が都市国家から領域国家に変貌したのである。そして、これらアッシュル市の支配下に置かれた地域を治める王として、アッシュル・ウバリト一世は「アッシュルの地の王」という称号を名乗った。「アッシュルの地」、アッシリアが誕生したのだ。

この新生アッシリアの勢いは続く前13世紀にも止まらなかった。アダド・ネラリー一世、シャルマネセル一世、そしてトゥクルティ・ニヌルター一世の下、旧ミッタニ領の北東シリアをバリフ川付近まで征服し、トゥクルティ・ニヌルター一世治世には南のバビロン市も支配下に置いた (Cancik-Kirschbaum 2000, Harrak 1987, Heinhold-Krahmer 1988, Yamada 2003)。アッシリア帝国の礎がここに築かれたのだ。その後、前12世紀に度重なる内紛などからアッシリアの勢力は一時的にやや弱体化するものの、領域国家としてのアッシリアが解体されることはなく、前一千年紀の大アッシリア帝国への道を進んでいった。

地域としてのアッシリアが成立し、アッシリア帝国が築かれ始めたこの前14世紀から前11世紀こそ、我々が呼ぶところの中期アッシリア時代なのだ。

### アッシリアの属領支配

では、後に全西アジア世界を席卷するアッシリア帝国の基礎はどのように築かれたのか。中期アッシリア時代、アッシリアはその領土を単に軍事的に制圧した

だけではない。その後も属領として統治したのだ。それまでごくわずかな領土しか治めたことのないアッシリヤ市は、この広大な領土を具体的にいかなる統治システムをもって支配したのか。

この課題の手掛かりになるのは、同時代の行政文書である。主として前13世紀後半に由来する行政文書が首都アッシリヤから多数出土している（Pedersen 1985）。さらに、中央以外においても、北イラクのテル・ピラ遺跡（シバニベ市）（Finkelstein 1953）やテル・リマフ遺跡（Saggs 1968, Wiseman 1968）、北東シリアのテル・シェイク・ハマド遺跡（ドウル・カトリム市）（Cancik-Kirschbaum 1996）やテル・フエラ遺跡（ハルベ市）（Kühne 1995）、テル・サビ・アブヤド遺跡（Wiggermann 2000）などから同時代の様々なタイプの地方行政文書が発見されている。そして、ここにテル・タバンの遺跡（タバトゥ市）出土文書が加わる（Shibata 2007）。この課題こそ、テル・タバンの出土中期アッシリヤ文書が最も貢献できる課題だ。

中期アッシリヤ行政文書は出版の遅れている文書ジャンルの一つであるため、この研究課題も現在進行中だ。とりあえずこれまで明らかになっていることを単純にまとめると、この時代アッシリヤの領土は *pālyutu* と呼ばれる行政州に分割されており、各州には最高責任者として州知事（*bēl pālyiti*）が中央より任命された。州知事の多くは、アッシリヤの名門一族から選ばれたようだ。州知事は各州の中心である州都に行政府（*ekallu* 「宮殿」）を構え、州の名もこの州都に基づいた。州内の行政 農業生産、労役、軍役 etc. は、この州都の行政府において管理された（Jakob 2003, Postgate 1988, Postgate 2007, Radner 2006）。

このような制度はアッシリヤが全て発明したのではなく、先行するミッタニ帝国、あるいはその支配下にあった地方王国の制度をある程度引継いだ可能性が高い。地方行政の重要な用語の多くがミッタニ帝国の公用語フリ語だからだ（Jakob 2003）。アッシリヤは既存の行政制度の上に「乗っかり」、徐々にアッシリヤ化を進めたのだろう。

既存のシステムを残す一方、アッシリヤは領土内の規格統一化も進めた。全ての行政文書を（言語、字体、書式、粘土板の形まで！）アッシリヤ式に統一し（Postgate 2007）、アッシリヤの暦（年を表す紀年職とカレンダー）を使わせ（Freydank 1991）さらに、（おそらく州行政府の管轄のもと）各地の土器工房において規格的な土器（いわゆる中期アッシリヤ土器）を大量生産させた（Pfälzner 1995, Pfälzner 1997）。

このようにしてアッシリヤは属領支配体制を確立し、領土はアッシリヤ化した。アッシリヤになったのだ。

アッシリヤ成立の精明に向けて テル・タバンの遺跡出土中期アッシリヤ文書がもたらすもの

以上のように簡潔にまとめたアッシリヤの成立だが、まだまだ多くのことがわからない。今後、新資料の発見と研究によって我々の理解がより細部に到ることが期待される。一方、予期せぬ展開を迎える可能性も十分にある。実は、そのような予期せぬ新情報をもたらしたのがテル・タバンの遺跡出土中期アッシリヤ文書であった。最後に、テル・タバンの文書の解読により現在明らかになりつつある中期アッシリヤ時代タバトゥ市の様相に言及し、このエッセイを締めくくりたい。

中期アッシリヤ時代のタバトゥ市は、アッシリヤの勢力下に置かれていたが、上に説明した他の属領からは明らかに逸脱した制度のもと統治されていた。この都市は、州知事やその下に位置する役人ではなく、「マリの地の王」を称する一種の地方領主によって支配されていたのである。この王の位は、少なくとも前13世紀中頃から前11世紀前半まで一つの家系において継承されていた。家系の構成員は全てアッシリヤ的な名前の持ち主であるため、この地方王朝の始祖はアッシリヤ市を出自としていると考えられる。アッシリヤ王家に連なる者であった可能性もある。そして、この王達は神殿や防御施設の建造に際して、アッシリヤ王のように建築記念碑文を作製していた。我々の知る限り、当時の他の州知事達はそのような碑文を作らなかった。これは王の特権と考えられる。一方で、この王達はアッシリヤに住むアッシリヤ王を宗主と仰ぎ、帝国に服属していた。言うなれば、属州ではなく属国である（Maul 2005, Shibata 2007）。

彼らの王宮行政に目を向けると、やはり他の属州には見られない独自の特徴が散見される。中でも特筆すべきは、王宮行政が独自の暦に従って行われていたことである。年の方はアッシリヤ式の紀年職によって数えられていたが、月の方がアッシリヤ式のものではない独自のカレンダーによって表記されていたのだ。このカレンダーはアッシリヤによるハブール川流域征服以前に遡るローカルなものであると考えられる。そして、その歴史は前18世紀まで遡る可能性もある。地元の古い伝統が存続していたのだ（Shibata 2007, Yamada forthcoming）。この地方王国の「アッシリヤ化」は、他の属州に比べると緩やかであったようだ。

この「マリの地の王」達が確認されている前13～11世紀、ハブール川流域はアッシリヤ帝国の西方フ



ロンティアの内側に位置した。帝国内部にこのような地方王朝が前一千年紀前半の一時期に幾つか存在していたことは既に知られていた (Cavigneaux & Ismail 1990, Postgate 2007)。しかし、そのような地方王朝がアッシリア帝国形成初期の段階である前二千年紀後半すでに存在していたというニュースは我々に少なからぬ驚愕をもたらした。テル・タバンの文書の発見は、アッシリア (帝国) 形成過程に関する今まで看過されてきた重要な側面に光を当てたのである。では、何故、帝国内部にこのような地方王朝が建てられたのか。地方王朝は帝国全体の運営においてどのような位置づけにあり、いかなる役割を果たしていたのか。そして、前一千年紀の大アッシリア帝国構築への流れの中、何れの運命をたどったのか。全て今後の研究課題であるが、この奇妙な地方王朝を研究することにより、我々はアッシリア成立の精確な理解にも近づくことになる。

#### 参考文献

- Andrae, W.  
1977 *Das wiedererstandene Assur*, 2nd ed., München.
- Cancik-Kirschbaum, E. C.  
1996 *Die mittellassyrischen Briefe aus Tall Šēh Ḥamad*, Berichte der Ausgrabung Tall Šēh Ḥamad / Dür-Katlimmu Band 4 Texte 1, Berlin.
- 2000 "Organisation und Verwaltung von Grenzgebieten in mittellassyrischer Zeit. Die Westgrenze", L. Milano et al. (eds.), *Landscapes. Territories, Frontiers and Horizons in the Ancient Near East*, History of the Ancient Near East/ Monographs III/ 2, Padova, pp. 5-8.
- Cavigneaux, A. & Ismail, B. K.  
1990 "Die Statthalter von Suḥu und Mari im 8. Jh. v. Chr. anhand neuer Texte aus den irakischen Grabungen im Staugebiet des Qadissiya-Damms", *BaM* 21, pp. 321-456.
- Charpin, D. et al.  
2004 *Mesopotamien. Die altbabylonische Zeit*, OBO 160/4, Fribourg & Göttingen.
- Finkelstein, J. J.  
1953 "Cuneiform Texts from Tell Billa", *JCS* 7, pp. 111-176.
- Freydank, H.  
1991 *Beiträge zur mittellassyrischen Chronologie und Geschichte*, Schriften zur Geschichte und Kultur des Alten Orients 21, Berlin.
- Grayson, A. K.  
1987 *Assyrian Rulers of the Third and Second Millennia BC (To 1115 BC)*, RIMA 1, Toronto.
- Harrak, A.  
1987 *Assyria and Ḥanigalbat. A Historical Reconstruction of Bilateral Relations from the Middle of the Fourteenth to the End of the Twelfth Centuries B.C.*, Texte und Studien zur Orientalistik 4, Hildesheim, 1987.
- Heinhold-Krahmer, S.  
1988 "Zu Salmanassars I. Eroberungen im Hurritergebiet", *AfO* 35, 1988, pp. 79-104.
- Jakob, S.  
2003 *Mittellassyrische Verwaltung und Sozialstruktur. Untersuchungen*, CM 29, Leiden & Boston.
- Küne, C.  
1995 "Ein mittellassyrisches Verwaltungsarchiv und andere Keilschrifttexte", W. Orthmann et al. (eds.), *Ausgrabungen in Tell Chuēra in Nordost-Syrien I*, Vorderasiatische Forschungen der Max Freiherr von Oppenheim-Stiftung 2, Saarbrücken, pp. 203-225, pl. 27-28.
- Maul, S. M.  
1997 "Die Altorientalische Hauptstadt - Abbild und Nabel der Welt", G. Wilhelm (ed.), *Die Orientalische Stadt. Kontinuität, Wandel, Bruch*, CDOG 1, Saarbrücken, pp.109-124.
- 2000 "Die Frühjahrsfeierlichkeiten in Aššur", A. R. George & I. L. Finkel (eds.), *Wisdom, Gods and Literature. Studies in Assyriology in Honour of W. G. Lambert*, Winona Lake, pp. 389-420.
- 2005 *Die Inschriften von Tall Ṭābān (Grabungskampagnen 1997-1999). Die Könige von Ṭābētu und das Land Māri in mittellassyrischer Zeit*, ASJ ss 2, Tokyo.
- Menzel, B.  
1981 *Assyrische Tempel*, Band I-II, Studia Pohl, Series Maior 10/ I-II, Rom.
- Michel, C.  
2003 *Old Assyrian Bibliography of Cuneiform Texts, Bullae, Seals and the Results of the Excavations at Aššur, Kültepe/ Kanis, Acemhöyük, Alişar and Boğazköy (Old Assyrian Archives, Studies, Volume 1)*, PIHANS 97, Leiden.
- Pedersén, O.  
1985 *Archives and Libraries in the City of Assur. A Sur-*

- vey of the Material from the German Excavations Part I, *Studia Semitica Upsaliensia* 6, Uppsala.
- Pfälzner, P.  
1995 *Mittanische und Mittelassyrische Keramik. Eine chronologische, Funktionale und Produktionsökonomische Analyse*, Berichte der Ausgrabung Tall Šeh Ḥamad/ Dūr-Katlimmu 3, Berlin.
- 1997 "Keramikproduktion und Provinzverwaltung im mittelassyrischen Reich", H. Waetzoldt & H. Hauptmann (eds.), *Assyrien im Wandel der Zeiten. XXXIXe Rencontre Assyriologique Internationale Heidelberg 6.-10. Juli 1992*, Heidelberger Studien zum Alten Orient 6, Heidelberg.
- Postgate, J. N.  
1988 *The Archive of Urad-Šerīa and his Family. A Middle Assyrian Household in Government Service*, Roma.
- 1992 *Early Mesopotamia. Society and Economy at the Dawn of History*, London & New York.
- 2007 *The Land of Assur and the Yoke of Assur. Studies on Assyria 1971-2005*, Oxford.
- Radner, K.  
2006 "Provinz. C. Assyrien", *Reallexikon der Assyriologie* 11, pp. 42-68.
- Saggs, H. W. F.  
1968 "The Tell al Rimah Tablets", *Iraq* 30, pp. 154-174, pl. 43-55.
- 1984 *The Might That Was Assyria*, London.
- Shibata, D.  
2007 "Middle Assyrian Administrative and Legal Texts from the 2005 Excavation at Tell Taban. A Preliminary Report", *al-Rāfidān* 28, pp. 63-74.
- Such-Gutiérrez, M.  
2003 *Beiträge zum Pantheon von Nippur im 3. Jahrtausend*, Teil I-II, *Materiali per il Vocabolario Sumerico* 9/ I-II, Roma.
- Villard, P.  
1995 "Shamshi-Adad and Sons: The Rise and Fall of an Upper Mesopotamian Empire", Sasson, J. M. et al. (eds.), *Civilizations of the Ancient Near East*, New York, pp. 873-883.
- Wegner, I.  
1981 *Gestalt und Kult der Istar-Šawuška in Kleinasien. Hurritologische Studien III*, AOAT 36, Neukirchen-Vluyn.
- Wiggermann, F. A. M.  
2000 "Agriculture in the Northern Balikh Valley. The Case of Middle Assyrian Tell Sabi Abyad", R. M. Jas (ed.), *Rainfall and Agriculture in Northern Mesopotamia (MOS Studies 3). Proceedings of the Third MOS Symposium (Leiden 1999)*, PIHANS 88, Leiden, pp. 171-231.
- Wiseman, D. J.  
1968 "The Tell al Rimah Tablets, 1966", *Iraq* 30, pp. 175-205.
- Yamada, S.  
2003 "Tukulti-Ninurta I, s Rule over Babylonia and Its Aftermath. A Historical Reconstruction", *Orient: Reports of the Society for Near Eastern Studies in Japan* 38, pp. 153-177.
- Forthcoming "A Preliminary Report on Old Babylonian Texts from the Excavation of Tell Taban in the 2005 and 2006 Seasons. The Middle Euphrates and the Habur Areas in the Post-Hammurabi Period", *al-Rāfidān* 29.

### 事務局だより

第3年次の研究が終了に近づいた現在、現地調査の遅れは回復しつつあります。また、現地調査が遅れていた間にも国内・外関連研究は着実に進行してきましたので、来年度以降は、現地調査の効果的な推進とあいまって、本領域の研究の一層の進展が期待できると思います。

総括班はこれまで以上に研究班各々の融合的な連携を促進し、本研究領域がその全体研究課題、すなわち、ユーフラテス河氾濫原農耕村落遺跡群、氾濫原直近墓地遺構群、ケルン墓群の3者にまたがる人間集団の動態の研究 「部族社会の形成」の時空的規則性の解明 「部族社会の形成」のモデル創出、に迫ることができるように尽力していくつもりです。

研究成果の積極的かつ迅速な公表という観点から、来年度もこのニューズレターへの積極的な投稿をお願いいたします

(大沼克彦)

---

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.10 2008年3月10日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」  
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」  
代表 大沼克彦

編集：総括班（大沼克彦・藤井純夫・西秋良宏・常木 晃・宮下佐江子・佐藤宏之）  
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1 国土館大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室  
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp  
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html

